

2021/11/4-2

(オマケの英語教室 you) 書庫版



お店で仕事をしていて困ると申しますか迷うと申しますか、兎に角一瞬戸惑ってしまう事があります。

それは外国人従業員に英語で話しかける時の you の使い方なのです。

日本語なら相手が一人の場合は「あなた」「君」「お前」で、二人以上の場合は「あなた方」「君たち」「お前達」と分かれていますので特に問題はありません。

しかし英語の場合、単数の「あなた」と複数を表す「あなた方」が分かれた表現にならずに同じ you なので困っているのです。

二人居て一人呼びたい時と二人共呼びたい時、声を掛けるのがどちらも同じ you だと声を掛ける方も困りますが掛けられた方も困っています。

お互い顔を見合わせて「二人呼ばれたんだらうか？それともどちらか一人？じゃあ、どっちだらう？」

と言った具合。

話は変わりますが自分は結構語学に興味があったので色々な言語を摘まみ食いしました。

そこでの雑学から、

英語以外、例えばフランス語でも「あなた」と「あなた方」は分かれておらず両方とも Vous(ヴ)

ロシア語でも同じ様に分かれておらずにいずれも Вы (ヴイ)

その代わり両言語とも親しさを表す、日本語のため口に当たる「君」「お前」と少し距離を置いたり敬意を払ったりする場合の言い方である「あなた」は区別されておりました。

前者はフランス語では tu (テュ) ロシア語では ты (テュイ)、後者は前出のフランス語では Vous (ヴ) ロシア語では Вы (ヴイ)

こうしてみると日本語は単数複数の区分けに加え、更のため口扱いと表敬扱い両方ともある訳ですから矢張り外国人にとってなかなか複雑な言語に映ってしまう様です。

ところが対極的に英語は単数複数の区別もありませんし、親近や表敬の度合いの区別もなく全てが you。

後にも先にもそれだけ。

一体何故そうなっているのか？

推測するに、それは英語を生んだ民族が区別する事で得られる使い勝手の良さよりも「完全平等」と「完全個性（個々人の独立）」という概念を優先したからではなかろうか？と。つまり「お前」と「あなた」という親近、上下の差がない「完全平等」と「お前ら」「あなた方」というのは、実は「あなたと、あなたと、あなたの n 乗、個々の集まり」であるという概念。

ところで私共はカーリー屋ですが、そのお店の名前は Namaste everybody.

Namaste（ナマステ）はネパール・インド地域では「こんにちは」を表す言葉。

Everybody は英語で「おのおの方」即ち「みなさん」を表します。

（換言すれば each of you）

ですので、私共のお店の名前は「こんにちは、みなさん」と言う事になります。

そこで思いついたのが

「ならば、外国人従業員全員に声を掛ける時は you の使い方をあれこれ考えるより、この everybody を使った方が良さそうだ」

と言う事で

「Hey, everybody!! Come here!!」（はい、みんな、こっち来て）

と言えればいいんだと。

補足）

ここに至る過程で考えた他の案は

All of you

You 2(two) 二人の場合

各人の名前

でした。

（因みに二人居て一人呼ぶ時は当然その人の名前で呼びます）